

研究経過報告

川上正浩

1992年の4月に助手として着任してから、あっという間に1年と半年が過ぎてしまった。以下にこの間の研究成果と研究経過について報告する。

1. 個人研究

個人研究としては、日本語の情報処理過程、特に視覚的に提示された語の認知に関心を持ち、取り組んでいる。論文としては、以下のものが心理学研究に掲載された。

川上正浩 1993 仮名語の語彙決定課題における表記の

親近性と処理単位 心理学研究, 64, 235-239.

2. 共同研究

共同研究として、大きく3つのテーマに関して研究を行っている。

A. 漢字の情報処理について

この研究は個人研究と密接に関連するものであり、漢字の情報処理について、熟語の処理、Migrationと呼ばれる誤った漢字の再認をキーに、人間情報学研究科の齋藤洋典氏、Max Planck Institut の Flores d'Arcais 氏と研究を行っている。これに関連して以下の発表を行った。

齋藤洋典・川上正浩 1992 “熟語らしさ”の意味抽出機構とその運用知識の規定因 日本認知科学会第9回大会発表論文集, 110-111.

齋藤洋典・川上正浩 1992 漢字2字熟語の「熟語らしさ」の規定因と心的評価機構 電子情報通信学会 1-8, NLC 92-1.

齋藤洋典・川上正浩・Flores d'Arcais, G. B. 1993 Radical migration in Kanji recognition. 日

本認知科学会第10回大会発表論文集, 88-89.

Saito, H., Kawakami, M., and Flores d'Arcais, G.B. 1993 Radical migration in Kanji recognition. Sixth International Symposium on Cognitive Aspects of the Chinese Language.

B. ワーキングメモリについて

人間の情報処理について、ワーキングメモリと呼ばれるモデルを中心に検討を加えている。現在は算盤学習者の認知機能について問題にしており、愛知淑徳大学の吉崎一人氏、北海道大学の行廣隆次氏と共同で研究を進めている。これに関連して、以下の発表を行った。

川上正浩・行廣隆次・吉崎一人 1993 そろばん学習児童のワーキングメモリ容量の測定 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 154.

C. 期限付き課題の遂行について

電車に間に合うように家を出る、レポートを期限内に仕上げ提出する、といった期限の付いた課題への遅れを、その認知過程から検討している。現在は質問紙調査の形で東京都老人総合研究所の川野健治氏と共同で研究を進めている。これに関連して、以下の発表を行った。

川上正浩・川野健治 1992 期限つき課題の遂行について—課題の認知と予定のシフト— 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 285.

川野健治・川上正浩 1993 期限つき課題の遂行について(2) 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 326.